
Air force

篠宮 夏希

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A i r f o r c e

【Nコード】

N 8 6 1 2 Y

【作者名】

篠宮 夏希

【あらすじ】

物語の舞台は、今より少し先の未来。

未来では、未成年による失踪事件が多発していた。

そして、主人公は変な人物と出会い、気絶させられてしまう。

次に目が覚めたのは、訳もわからない森の中！？

全く新しい（？）かは分かりませんが、SF系ファンタジー始動！

第一話：シルクハット

2089年。

気が付けば、日本は科学先進国となっていた。

今俺が歩いている街中も、ゴミ拾いロボットや警官ロボット、さらには店専用の宣伝ロボットなどもいたりする。

形なんかは様々だが、その役目に最も効果的なものが採用されるのが普通だ。

例えば警官ロボ。

こいつはボディが小さく作られており、動きが素早い。内臓機能で、指名手配犯を全員インプットしてたり、手錠にスタンガン、ゴム弾なんてのも装備されているらしい。

物騒な世の中になったもんだ。

と言っても、俺は現代人なので昔のことは知らないが。

俺は、立ち止まり、喉を突き出しながら空を見上げる。

周りには超高層ビルが数建。

その上を、新型旅客機が通過している。

さすがに、どこかのSF映画に出てくる、空飛ぶ車の実現には『まだ』いたってないとのこと……。

しかし、科学が進化する一方で、犯罪の方も凶悪で犯しやすくなっているのも事実。

万引き防止などをチェックするための機械。
あれが店内の出口には必ず取り付けられているため、店の方も安心できた。

だが、それもついこの前までの話だ。
科学が進化したおかげで、その機械の機能をジャミングするモノが最近出回っている。

そのため、多くの店舗が防犯カメラの設置数を増やしているらしい。

所詮、人間とロボットだ。

どれだけ頑張っても、犯罪者が居なくなるということはない。

いくら科学が進化しても、たったそれだけの話。

いつの時代もこの構造は絶対崩れないのだろう。

それだけは、変わらない気がする。

「またか・・・」

俺はテレビ放送局のビルに取り付けられている、巨大TVを見ながら一人呟いた。

ニュースで報道されているのは、最近頻繁になってきている『未成年連続失踪事件』について。

この連続失踪事件は、今年の春頃から起き始めていることが最近明らかになった。
ということは、もうかれこれ3ヶ月は経っていることになる。

それだけ時間が経過していながら、姿をくらました人々は『誰一人』として、発見されていない。

「えー、今日一日だけで、分かっている失踪者は20人以上と警察署からの報告です。

未だに原因は不明とのことですので、みなさまも十分ご注意ください。それでは、」

ニュースキャスターが一礼して、ニュースは終了。それと同時に、時刻は21時を迎えていた。

「ふう、そろそろ帰らないと俺も危ないな」

俺はTV画面から目を離し、再び足を進める。

危ないというのは、先程のニュースでやっていた原因不明の、不気味な失踪事件のこともあるし、何より俺は未成年者だ。

この時間に出歩いて、警官やロボに捕まると色々面倒なことになる。

なので、そろそろ退散することにした。

……のだが、

『ピーピー、現在時刻21時4分。未成年者と思われる人物発見。身分を証明してください。』

背後から、機械音声が流れるのが聞こえた気がした。

周りの視線が、俺に集まっているのはきつと気のせいだろう。

そう……

「信じたい！」

俺は全力ダッシュ。

ロボの方は、なんともスピーディな動きで俺を追いかけてくる。
不意打ちをかけて、少しだけ出遅れてはくれたが、このままだと捕まるのも時間の問題だ。

（何か……何かないのか！）

走りながら、俺はこの危機的状況を回避するべく当たりを見回す。

（……………！！）

そこで目に入ったもの。

「これなら……どうだ！」

俺は急カーブをして、細い路地裏へと走り込む。

普通この様な路地裏には、ヤンキーやナンパ、薬物の売人達のテリトリーだったりするものだ。

もちろん、それを取りしまわないロボではない。

しかも、細い路地は妙に入り組んでいて、遠隔操作の警官ロボの効果が薄れる。

『ビー！　ビー！　こちら、a-149。路地裏にて怪しい人物を多数確認。確保します。』

「ザザ……、了解。こちらも、今向かっている」

人間の警官からの指示を受け、ロボは強力ネットを発射。

細い路地に、巨大なクモの巣ができた。

「ッ・・・！？ やべっ！」

巨大なクモの巣は、走っている俺の身にも降りかかってくる。

俺は、さらにスピードを出して、左へと曲がりどうにか回避。

『ビー！ ビー！ その者、止まりなさい』

後ろからロボの声が聞こえてくるが、止まる気はない。

そのまま右へ、左へ、さらに左へ・・・。

俺は、狭い路地を5分間も走り抜け、ようやくロボを巻いた。

「ハアッ・・・ハアッ・・・」

久々の全力ダッシュを5分間持続し続けた俺の額からは、汗が垂れる。

少し歩くと、広めの道路に出た。

建物の壁に寄りかかりながら汗を拭う。

「ハハッ、これは師匠に感謝しなきゃな」

息切れしながらも、恩師に感謝を述べる。

別に師匠はロボから逃げるために、俺を鍛えてくれたわけではないが・・・。

まあ、よしとしておこう。

「っふう・・・」

大きく息を吐いて、家へと帰ろうとする。

「って、ここはどこだ？」

俺が出た道路は住宅街で、家の所々に明かりが灯り、笑い声が聞こえてきた。

（・・・楽しそうだな）

正直言つて、ちょっと羨ましかった。

俺の家族は、俺に、双子の妹弟、母さんの4人家族。
本当は5人だったのだが、父さんは俺が中学に上がる頃・・・つま

り1年と少し前に他界してしまった。

研究者という職業柄、なかなか遊んでもらうことはできなかったが、面白くて、優しい父さんだったと思う。

死因は、母さんからは詳しく教えてもらえないし、そこまで知りたいとも思わない。

なんて、むかしのことを思い出しながら、携帯の画面を眺める。

現在の位置情報を確認しながら歩く。

『ドシンッ!』

携帯の画面に意識がいったため、周りを見ていなかった俺は人とぶつかって倒れた。

「イテ……。っと、すいません。大丈夫でしたか？」

俺は、ぶつかつた人物の方に目をやり、硬直した。

その人物は、なんとも奇妙な格好をしていたため、驚いたのだ。

頭にはシルクハット、タキシードに杖。鼻より上は仮面で隠れていて見えないが・・・。

こんな蒸し暑い日に、なんて格好をしているのだろう。

今日の最高気温は、31度。

いくら夜とは言っても、25度くらいはあるだろう。

そんな時、人物は俺に手を差し出していた。

珍妙な格好に見とれ、気がつかなかったが・・・。

「あ、ありがとうござ・・・ッ!？」

俺が手を握ろうとしたとき、急に人物からとてつもない悪寒を感じた。

（何か嫌な予感がしないでもないような・・・）

そう、まるで早く握れと言わんばかりのようだ。

不気味に感じた俺は自分の足で起き上がる。

人物は手を差し伸べたまま首をかしげている。

それに対し、俺は「以後、気を付けます」と礼儀正しく述べ、立ち去る。

『これは面白い。』

唐突に声が届いてきた。

今まで何もしゃべらなかった人物が、ようやく口を開いたのだ。

ゆっくり振り返ってみると、男は杖をくるくると振り回し、なにやら意味有りげな笑みを浮かべている。

『これを見破られたのは、あなたが初めてですよ。』

そう言った男は、差し伸べてきた手と反対の服の袖からスタンガンを出して来た。

バチバチと、唸りを上げながら青っぽく光る。

「そうかい。それで、俺なんか何の用？」

生憎、俺は友達というものが少ない。

この、どこか抜けている性格のせいだろうか？

いや、自覚はしてるからそこまで酷くないと思う。

どっちにしろこんな変人は近寄りたくもない、というのが正直な感想だ。

『いや、あなたにちょっとした実験に付き合っていただこうかと。』

「実験？」

意外なことを言われたものだから、俺は思わず聞き返した。

『ええ。他にも人員を投入しているんですが、なかなか合格者がでなくて困っているんですよ。』

合格者？

「なんのことだ？」

フフッと、男は笑った。

『それは、あちらに着いてからにしましょう』

こいつはさっきから何を言ってるんだ？

訳も分からず、俺は男を見つめた。

『おやおや、そんな目で見つめないでください。照れてしまいま・・すっ！』

「ッ・・！？」

男は勢いよくこちらへ、突っ込んできた。

右手に杖、左手にはスタンガンと、非常に危険だ。

まずはじめに、杖を向けてくる。

それを躲したかと思ったら、スタンガン。

いくら俺でも、これを長時間耐え続けるのは厳しい。

「チッ！」

舌打ちして、俺は男の持っていたスタンガンを蹴り飛ばす。

しかし、男は気にせず杖で攻撃してくる。

「クソッ・・・」

一度間合いを取る。

『先ほどにプラスして、これほどは・・・。今回はいい収穫ができましたかね。』

今回はっていうことは、何回もやってるのか？

考えれば、考えるほど疑問が浮かび上がる。

「ハッ、悪いがあんたに収穫される気はないぜ？」

ちよつとかつこつけて言ってみる。

『それは困りましたね……。仕方がない、あれを使いますか。
まあ、まだ試作段階ですけど、あなたなら大丈夫でしょう』

男の周りから、バチバチと何か音がした。

それは、青く光散らし、男の右手に集まっていく。
先程のスタンガンという訳ではない。

「おいおい……。なんだよそれ」

俺は自分の目の前で起きていることが、信じられなくて声を漏らした。

男のそれは、超能力や魔法などしか言い表しようがなかったのだ。

『これは、まだ試したことがないんで、加減がいまいちわかりませんが……。』

ちよつとぐらい痛い思いをしても、悪く思わないでくださいね?』

そう確認を取った男は、俺に光るものを飛ばしてくる。

躲すとか、そんなレベルじゃなかった。

ただ目の前に、巨大な光が現れて、俺は飲み込まれていった。

「ガアアアアアアアアアアアアアア……」

住宅街に、強烈な光と叫び声が響いた。

第二話：森の中（前書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんわ。
作者の夏希です。

エア フォース第二話でございます。
よろしく願います。

第二話：森の中

紅葉、知っているか？

なにをだよ。

（これは・・・俺の記憶？）

とあるアメリカの作家がいったんだ。

男は強くなければ生きていけない、
優しくなければ生きる資格がないと。

いや、いきなり言われても意味わかんないから・・・。

つまり、俺がお前に言いたいのは、強くなれ！　そして優しく！
そのまんまで分かりやすいだろ？

確かにそうだけど……。なんで今それを言うんだよ。

(この声……。親父なのか？)

誰よりも大きく育て。

もし俺が会いにこれなくなっても、誰かを守れるだけの力を身につけるんだ。

……。まあ、分かったよ。

よし！　じゃあ、お前にこれを渡そう！

これが、俺が見た最後の親父の姿。

その日もいつもと同じように、「じゃあなー！」。

そう言って家を出ていった。

「んによ．．．．．」

（いつのまに俺は眠っていたんだ？）

目をこすりながら、周りを見て回す。

「．．．．．」

もう一度、目をこすって、頬を引っ張ってみる。

うん、痛い。

これは夢じゃない。

「どこだよ・・・ここ・・・？」

俺が目を覚ました場所は、森の中。

俺の頭が正常だったのなら、こんな場所で寝るはずがない。

なら・・・

「なんで？」

キョトンと、しながら首をひねる。

（えっと、俺は寝る前に・・・）

顎に手を当て、それっぽいポーズをとる。

「そつだよ！ あの仮面にやられたんだ！」

記憶を絞り出して、俺はようやく思い出した。

警官ロボから逃げて、帰ろうとしたときにあいつに襲われた。
でも、最後に見たあれはなんだったんだ？

さらに首をひねる。

しかも、目が覚めたら変な場所にいるし・・・。

どうなってる？

「だああああああ、ちくしょう！」

どでんと横になる。

（訳が分からん）

森に吹く風が少し心地いい。

木の香り、鳥の声、ぽかぽかした太陽。

何か、今までの自分が馬鹿みたいに思えてきた。

『バキバキ！』

ほら、バキバキって爽快な音もする。

おまけに、地面は揺り籠のように揺れる。

「ふああ……」

なんだか眠たくなってきた。

『バキバキ！　ズシーン！』

なんだか響きのいい音が途絶えたと思ったら、俺を照らしていた太陽が隠れた。

「ん・・・？」

急に寒くなってきたものだから、思わず片目を開ける。

それは、太陽と重なっているためよく見えなかった。

だが、俺の顔の横にダラダラと、なんだか汚い液がたれてきたことでちょっとした危機感を覚える。

上半身を軽く起こしながら、それをしっかりと確認しようとする。

見た目は3メートルくらいで、その表面はウロコに覆われていた。口からは牙が何本も見え隠れしていて、眼には俺の姿が移りながらも輝いていた。

「おいおい・・・冗談はおやめなさいよ・・・」

ゴクリと喉を鳴らす。

『グルウアアアアアアア！！』
「うひゃあああああああああ！？」

俺は、またもダッシュする。

後ろからは、小さなロボット。

・・・なら、まだ良かった。

あれはどう見ても恐竜か、ゲームとかに出てくるモンスターだ。

ドシンドシンと言いながら、恐竜は追いかけてくる。

距離は5メートルといったところだろうか。

恐竜は、その大きさからは想像できないスピードと俊敏さだ。

後ろを振り返る。

「どうわあああああああ！」

半分涙目になりながら、逃げることに3分。

恐竜を巻いて、森から脱出。

『グアアアアアア・・・』

遠くからまだ声がしてくる。

ここにも来るかもしれないので、慌てて移動する。

「というか、今日は走ってばかりだな・・・」

いや、でも今日って表現の仕方は正しくないのか？

眠る前は夜だったけど、ここじゃもう朝だし・・・。

「お！」

考え事していると、少し遠くに街らしきものを発見。

でもその街は、日本とは全然違う作りのようにも見えた。

「とりあえず行ってみるか」

そう言って、街へと向かった。

一人の少年が、街へと向かって歩いている頃。

森の中では、全長3メートルはあるであろう恐竜が暴れていた。

少女は、強大な力を感知してここまでやって来たのだが……。

「こいつのせいなの？」

一人つぶやき、途中拾ってきた石を恐竜へと思いっきり投げつける。

『ギユアアア！』

少女の存在にようやく気がついたのか、ギロリと目をむき出している。

「そんなわけないか……」

かなり残念そうな少女は目を瞑り、ため息混じりに唱えた。

「破壊の雷よ、滅せ。」

少女が目を開けると同時に、轟音と衝撃が森中に響いた。

恐竜がさっきまでいた場所には、大きなクレーターのようなものができていた。

少女は、ここに来る途中に突如感じた大きな力。
その正体を探りながら声を漏らす。

「あれほどの力・・・一体あなたは誰なの？」

第二話：森の中（後書き）

こんな作品を読んでくださってありがとうございます！

次からは、最悪でも二日に一話程度のスピードで更新していきます！

第三話・ヤンキーとフード（前書き）

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ。

夏希でございます。

第三話始まりました。

よろしく願いできたらなーと思います。

第三話：ヤンキーとフード

あれから何分もしないうちに、俺は街へとたどり着いた。

途中で、なにやら大きな音が森から聞こえてきたのだが、さっきの恐竜が暴れているのだろうか。

「おお・・・」

街は遠くから見るとそうでもなかったが、入口まで来てみると結構なでかさだった。

中に入り、少し歩いてみる。

通り過ぎる人々の格好は、まるでファンタジーゲームに出てくるような格好をしていた。

しかも、その人々の視線が俺に集まっている。

（なんか、これも最近体感したような・・・）

ちょっと照れながらうつむく。

（どこか、情報がもらえそうな場所はないかな・・・）

俺は、とりあえず情報が欲しいと思ったのだ。

街に入ったときに、雰囲気からして外国なのかとも思ったが、歩いている人たちの顔は日本風で、屋外のカフェ的な場所から聞こえてくる話声も日本語だ。

（まったく、ここはどこなんだよ・・・）

ますます訳が分からなくなってきた。

（お！ あそこなんかで情報が聞けたりしないかな？）

俺は、人々が集まっている場所を発見。

何かを中心に囲んでいるようにも見えたが・・・。

「ねえ、これは何やってんの？」

気になった俺は、近くにいた男に話しかけてみた。

男は、俺の方を見てしばらく顔を顰めていた。

「聞いてる？」

おおっ!？

と、驚きながらも男は答えてみせた。

「喧嘩らしいぜ。あの顔を隠してるほうが、ヤンキーに吹っかけたらしい」

俺は、人ごみの中心に目をやると確かに見た目ヤンキーがいた。その前には、男に胸ぐらをつかまれているグレーなフードを被っていて顔が見えない。

それを俺もしばらく見ている。

ヤンキーはガミガミと怒鳴りつけているが、対してフードは黙ってそれを聞いているだけだ。

「てんめえ・・・!」

俺が見物し始めてから、3分位たった頃だろうか。

無視し続けるフードに、ヤンキーはさすがに痺れを切らしたようだ。

「なめんなよ!」

さすがヤンキー。

なんとも古臭いセリフを使ってくれる。

しかし、大きく振りかぶったヤンキーの攻撃はハズレ、見事に空気をつかんでいた。

フードはいつの間にかヤンキーの腕をすり抜け、気が付けば人ごみの中に紛れ込んでいた。

「フン、だから止めとけといったのだ。お前程度では相手にならん」
「なっ……なんだと、てめえ！」

俺から見ても、ヤンキーじゃあのフードには、一撃も食らわせれないだろう。

ヤンキーが本気を出していないなら別だが、それはないと思うし。

なんとも無謀なヤンキーは、フードのいる人混み目掛けて走った。
見物者は、慌てて退散。

「やれやれ、まだ来るのか？ どうやら、一度力の差を見せてやらねばないらしいな」

「余裕こいてんじゃねえ！ これが俺のくエア>だ！」

そう言った後、フードの周りが急に爆発した。

何が起こったのかよく理解できなかった俺だが、ヤンキーの攻撃は

止まらない。

ヤンキーが次々と爆発を起こした（？）せいで、辺りは砂ぼこりが立ちこめっている。

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・」

実は、隠し球を持っていたのか。

（これはとんだ誤算だったな・・・。）

心の中で呟く。

数秒したところで、ようやく見晴らしが良くなっていく。

「ハッ、跡形も無く散ったか。俺をなめて掛かってくるからそうなるんだよ！」

お前は馬鹿カッ！？

って思いつきり突っ込んでやりたい。

ヤンキーによる、爆発はすごかった。

ただ、すごかったが跡形もなくは無理じゃないか？

普通骨は残るだろうし、フードがこれくらいでやられるとも考えられない。

その時だ。

ヤンキーが横方向にぶっ飛んだ。

目測だが、軽く10メートルは飛んだのじゃないだろうか。

その一方で、先程までヤンキーが立っていた場所には、フードがいた。

俺が考えていたとおり、フードは生きている。

そして言った。

「ほら、立ってみせろ。まだ終わったわけじゃないぞ！」

ヤンキーは力を振り絞って、なんとか立ち上がろうとしている。そこへフードが駆ける。

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうした!？」

まだ完全に立ち上がっていないのに、フードは容赦なく蹴りを入れる。

見物者も、見るのに耐え難いのか、その場を離れるものが増えていた。

「ゴハッ……！」

ヤンキーが血を吹き出す。

それを見てもフードは止めようとしなない。

「おいおい、こんなところで物騒なもんはやめてくれよ……」

近くの男が深刻な……青ざめた表情で言った。

さすがに俺もこんなのは見たくはない。

余りにも一方的すぎて、話になっていない。

「クッ……！」

俺は拳を作って、思い切り力を込める。

爪が肉に食い込んできて、タラタラとなにか生暖かいものが流れ出た。

必死にこらえる。

ここで俺が助けてもいいのだろうか？

「ガハッ……！」

攻撃が止んだところで、ヤンキーが息を吸い込もうとしている。

「フッ、これで分かっただろう。貴様程度、私たちの相手などではないわ！」

フードは腰に刺していた剣を、音を立てながら抜き取った。

（あいつ、本気か！？）

そうでないと信じたいが、口元からは不気味な笑い声を発している。

「くそ！ 悪いがこいつを借りる！」

俺は近くにいた男から、ほとんど無断で剣を抜き取り0から一気に加速させる。

風が俺の頬を撫でる。

見物者からは、女性の悲鳴も聞こえてくる。

目を閉じる。

二人とも距離は、8メートル。

既にフードの剣は降りおろされている。

(頼む、間に・・・)

[illegible]

「ガイーン!!」

金属同士がぶつかった。

俺の剣と、フーダの剣だ。

どうにか間に合った。

心の中で、少しだけ安心する。

「誰です、あなたは？」

フードは先程までの狂気をどこかに、静かな声で聞いてきた。

「こいつを助けにやって来た、ただの乱入者だ」

剣を重ねながら、俺は後ろにいるヤンキーをちらりと見る。

「もう十分だろ？ こいつはもう立てないんだぞ？ これ以上痛めつける必要がどこにあるんだよ！？」

最後の一言は怒鳴った。

それまでにヤンキーのやられ用は酷かったのだ。

「ただの乱入者のあなたに何が言えるのですか？ 邪魔です、退いてください」

フードが殺気を放ってくる。

軽くひるんだが、この程度でやられる俺じゃない。

「それは・・・できない」

辺りが静まり返った。

誰もが俺たちの行く末を観察している。

「そうですか。それは残念です、犠牲者がまた一人増えたわけですから！」

フードは一度剣を引き、俺の体制を崩してきた。

崩れた体制からフードの方を見ると、めくれた場所から狂喜の表情を見せていた。

「さよなら、お元気で」

静かに、ニヤニヤしながら俺に向かっていった。

「悪いが、まだ死ぬつもりはないんでな」

「え!？」

フードは、自分の肩に置かれている重さを確かめながら、驚いていた。

それもそうだ。

なんせ、今自分が切りつけたハズの男が、逆に剣を突きつけている。

汗がじわじわと浮かんでくる。

「分かったか？ お前程度では、俺には勝てない。敗北を悟ったのなら、立ち去れ」

低い声で、威圧感を与えながら提案した。

「……だ……まだだ!!」

提案は受け付けてはもらえなかったようだ。

「はぁ……」

非常に残念な表情をする。

フードは、クルリと剣を握ったまま一回転してきたが、俺は既にフーダの後ろに回り込んでいた。

「なっ……!!?」

なぜまた後ろを取られている!?

といったところだろうか。

「くうっ……」

「どうせ、今の攻撃も見えてなかったんだろ？」

しかし、フードは一度距離をとり剣を構え直す。

これはいい判断だと思う。

ん？

なんか、フードの周りにあた物や、見物者の剣がふわふわと浮いているんだが・・・。

その時、後ろから声がした。

「クソッ・・・、そいつの<エア>はヤベェ！ 早く逃げろ！」

それは倒れこんだままのヤンキーだ。

エアって、さっきヤンキーが使ってたやつみたいなのか？

っていうことは・・・。

俺がヤンキーの言葉を察したときには、フードのエアは完成していた。

「ハハ……こいつは……」

フードの頭上には幾選の剣が舞っている。

標的はもちろん俺たち。

笑えない冗談だ。

これは………もう、うん。

「戦略的撤退だ！」

大きく叫び、俺はヤンキーをおんぶし、速攻で消え去る。

後ろからは、大量の剣を従えたフードが追ってくる。

こうして、本日(?) 3回目の鬼ごっこは始まった。

かと思いきや、フードは案外あっさりと諦めてくれた。

「ハア・・・ハア・・・ハッ・・・」

細かく呼吸をして、高まる心臓を静める。

ちらりと横にいるヤンキーの方を見してみる。

なんだかぐったりとしながら壁に寄り添っている。

「あの・・・大丈夫ですか？」

ぴくりとも動かないので、声をかけてみる。

・・・。。。

返事がなかなか来ない。

「ああ、悪いな。少しボーっとしてた」

よかった、意識はあるみたいだな。

「お前、名前は？」

ヤンキーが俺に聞いてきた。

「俺は、一条 紅葉（いちじょう くれは）。最近16になった」

「紅葉か……。俺は冬月 翔（ふゆつき しょう）だ。紅葉と同じ年だな」

この人俺と同じ年なの！？

正直言っただけかなり驚きだ。

見た目からして、19はいつてると思ってたのに……。

やっぱり見た目で人を判断するのはいけないな。

「改めて礼を言わせてもらおう。ありがとう」

「いえいえ。こっちとしてもいろいろ聞きたいことがあるんだけど・」

「別に構わない」

「それは良かった。よろしく」

赤い夕焼けに照らされながら、俺は手を指し伸ばす。

翔も、軽く笑いながら握ってくれた。

「こちらもよろしく頼む。お前から学べそうなのがありそうだしな」

手を握ったまま翔を立たせる。

「それで、どこかゆつくりできる場所に行きたいんだけど」

このままでいるのもなんだし。

「ああ・・・それならこの通りを真っ直ぐ歩いていけばカフェみたいなところがある。そこがいいだろう」

そう言われ、俺は翔の肩を担ぎながらカフェへと向かうのであった。

第三話：ヤンキーとフード（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回は何かスゲー微妙な感じで終わったのは気にせず、スルーで。

いや、言い訳でしかないんですけど、この世界についての説明が思ったより長かったので、次回にします。

そして、次回の次から本格始動！

第一章が始まります！

第四話…とあるカフェにて（前書き）

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ。

夏希でございます。

ようやくこの世界に付いて説明することができた。

これから少しはやりやすくなっていくのかな？

それはわかりませんがどうぞ。

第四話：とあるカフェにて

時は少し遡る。

これはとある少年たちが鬼ごっこをしている時だ。

「クソ、油断した。まさか逃げるなんて・・・」

フードを深くかぶった少女は、前方を走っている二人の少年たちを追いかける。

しかし、そのうちの一人は先程少女が痛めつけたため、もう一人の赤髪の少年におんぶされている。

（少しずつだけど距離も縮まってきたし、ここから剣を飛ばせば当たるだろうか・・・？）

少年たちとの距離は、およそ15メートル。

頑張れば届かない距離でもない。

（試すだけ試してみるか）

少女はぺろっと舌を出し、集中しようとした。

しかし、目の前に人影が見えたのでそれを中止。
靴を地面と擦り合わせながら、急停止する。

どうにか止まった少女は、ロボットのような動きでその人物の顔を
拝見する。

ゴクリ……。

「た……隊長……」

隊長と呼ばれる女性は、ニッコリと笑ってみせる。

だが、目が笑っていない。

「あなたのエアまで出して何をやっていたの？」

少女はどうか言い訳を考える。

「えつとですね……ちょっとしたトラブルが起きまして、それを
対処するために……仕方がなく……です」

嫌な汗が体中から滲み出てくる。

「まあ、いいでしょう」

(ふう…….なんとかなった…….のか?)

少しだけ安心した少女。

(でも．．．あの赤髪．．．)

少女は先程の戦鬪を思い出していた。

（動きがただものじゃない……。でも、服は向こうのままだったし……）

隊長の横を歩きながら考え込む。

（もしかして新参者？ でも・・・見たところ服は新しそうだったし・・・汚れも無くここまでこれるとは思えない）

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

気づかぬ内に少女は立ち止まっていた。

「一体どういふことなの・・・？」

「どうかしたの？」

隊長の言葉で、ようやく我に帰る。

「いえ、何でもありません」

「そう、なら行きましょう？」

「はい、すみません」

駆け足になりながら隊長の後ろを追っていった。

『カランカラン』

鈴の音が店内に響き、俺たちの入店を知らせる。

「いらっしやいませ」

店員と思われる男が、深々と一礼して席へと案内してくれた。

「ご注文はお決まりでしょうか」

店員が訪ねてきた。

てか、今来たばっかなのに決まってるはずないだろ。

「じゃあ、コーヒー頼む」

いや、おい！

ここは俺も流れに乗らないとあれだな・・・うん。

「んと、カフェオレで」

「かしこまりました」

店員が店の奥へと入っていった。

「それで？ 俺に聞きたいことっていうのは？」

翔が早速持ちかけてきた。

「ああ、それなんだが……。まず、ここがどこなのか知りたい」

「ここは都市＜カルネア＞だが」

うーんと……。話がかみ合ってませんね、はい。

「えーと、そうじゃなくて……。なんていうか、ここ自体がどこか知りたい。まずここが日本じゃないのはわかった」

「はあ！？ お前今まで知らないでいたのか？」

いや、そう言われても目が覚めたのさっきだし……。

「うん、まあそうだね」

「最初の説明はちゃんと聞いてたのか？」

「最初の説明って？」

「あつただろ、最初目が覚めたとき周りにいた人と一緒に、受けな

かったのか？」

えー・・・。

俺目が覚めたら森の中で、周りに人なんて居なかったんだけど。

「受けてないことになるのか・・・な？」

翔は眉毛を八の字にしている。

「あの、悪いんだけどさ、先に俺の質問に答えてくれないか？
それが終わったら、こっちも説明する」

もうなんだか混乱して訳が分からん。

「そうだな、そのほうが分かりやすいか」

どうやら翔の方も納得してくれたようで、安心した。

「それじゃあ、この世界のことをいろいろ説明するぞ。」

1に、まずここは異世界であること・・・。
「ちよつと待てーい！ー！」

今なんて言った？

ここは異世界？

なにそれ美味しいの？

「2に・・・」

「いや、待てって!？」

完璧なまでにスルーしようとする翔をストップさせる。

「なんだよ？」

なんだよって、そんなかつこいい顔で言われても・・・。

「いきなり異世界って・・・マジなの？」

「そうだって言ってるだろ。それで、次行ってもいいか？」

正直言つて、まだ気持ちの整理がついてないんだが・・・。

「ああ、止めて悪かった。続けてくれ」

「んじゃあ、

2に、この世界の脱出方法。

この世界から、元の世界に戻るにはくボスを倒さなければならない

らしいな。

攻略していく内にわかるそうだが、今はまだそんな情報は入っていない。

3に、力について。

この世界に来たものは必ず、ある能力に目覚めるそうだが、それがさっき俺たちが使っていたくエア>だ。
エアは、人それぞれ使える技が違いうらしい。

4に、敵やお金。

まず、敵は主に街の外にしか出ない。
俺たちは普通にモンスターと呼んでる。

そのモンスターたちには、必ず核（コア）がある。
それを破壊することによって、モンスターは消滅しアイテムを落とすんだ。

それを売却してお金に、食料なら調理することもできる。

5に、ギルドやチーム。

これは最初に説明はされなかったが、知っておいた方と思うから説明しておく。

ギルドはゲームなんかでもあるように、大人数で行動したり、メンバー同士で狩りを行ったりする。

大きなギルドは『エスケープ』と呼ばれている奴だな。位なんても用意されているらしい。

チームはギルドほど大人数ではなく、ごく少数で攻略を目指しているモノたちだ。

と、まあこんな感じだが、質問はあるか？」

随分と丁寧なご説明で・・・。

「えっと、力についてのエアだが、どうやったら使えるかが知りたい」

「そうだな。＜エア＞を使うにあたって、必要なのは想像力と集中力かな。最初に使った時は、脳みそが痛くなるが慣れればなんともない。

あと、慣れればなれるほど技のイメージが固定ささって、より強力に、スピーディにもなる」

なるほど、要は努力に勝るものはない。
ということか・・・。

「それは分かったが、さっきエアは人によって違うとか言ってなかったか？」

「おっと、忘れてた。じゃあまず、ポケットになんか入ってないか？」

・・・？

まあ、とりあえず言われたとおりにしておこう。

俺はジャージのポケットを探る。

『むぎゅー！』

何か今むぎゅ、とか言っただぞ？

俺はそれをつまみ、確かめる。

「これは、風船・・・？」

俺が手にしてるのは、黒く彩られた風船。
どう見てもただの風船だ。

「この風船がなんだ？」

「後でわかるさ。」

次に、風船を口を使わずに膨らましてくれ」

「はぁ！？」

口を使わずに膨らます！？

確かに人間皮膚呼吸はしてるけど、いくらなんでも無理だろ。

「すまない、言い方が悪かったな。膨らますイメージをしてくれ」

なんだ、イメージか。
なら結構簡単なんじゃないか？

とか思ったが、案外難しいかった。

「ほら、力を抜け。ゆっくりと、自然に膨らんでいくようなイメージだ」

（そう言われてもなあ・・・）

リラックスして、一度息を吐く。

「ふう・・・」

目を閉じて、イメージ。

『ツパアン！！』

「うお！？」

ものすごい破裂音がカフェ店内に響いた。

それを近距離で食らった俺は、耳がキーンとしている。

驚きながらも、当たりを見回すと翔の姿がなかった。

「いやー、相変わらずでかい音だな・・・」

離れたカウンターから、翔が姿を見せる。

「お前・・・確信犯だろ！ さっきまでフラフラだったくせに、なんでそんなところに行ってたんだよ！？」

「いやいや、ただ疲れと痛みをとるための薬が売ってたから買って飲んだだけだ。決して、大きな音が鳴るのを知ってて逃げたわけじゃない」

その言葉が逆に怪しいんだが・・・

というかそんな薬があるのか？

「まあいいや。それで？このあとどうすればいいんだ？」

「割れた風船の中から、なんか紙が出てこなかったか？」

風船のゴムが散らかっているのをどかしながら、探してみる。

「・・・・・・・・ないんだけど」

机の上には、なかった。
なら下はどうだ！

ダメだった・・・・・・・・。

「おい、その紙には何が書いてあるんだ？」

「使えるエアの名前。俺はく爆発>って書いてあったな」

え？

それってないとまずいんじゃない？

「つまり、それがないとエアが使えない・・・・？」

「使えなくはないが、自分のエアがわかってないから発動できない
と思うぞ？」

グアアアアアアア！！

つまり使えないんじゃない？

チーン。

俺オワタ・・・。

「んでさ、お前の方からの説明は？」

「この非常事態を華麗にスルー！？」

俺はこんなになっているのに・・・。

「だってないものはしょうがねーだろ。諦めろ」

「諦めるじゃないでしょ！？他に調べる方法はないの？」

「ない」

即答された。

もうちょっと考えてくれても・・・。

「いいから説明しろよ」

怒られた。

「グスッ……。えっと・・・俺は向こうの世界で、変な仮面の男に襲われて、その後目が覚めたら森の中だった」

事実だしね。

「モンスターにやられて、ここの世界の記憶がなくなったとかは？」

うーん……。。

「ないと思うぞ？」

「そうなのか。まあどっちでもいいけどさ・・・」

「聞いたってどっちでもいってどうなんだよ!？」

すかさずシッ「ミ」。

「さっきからうるせえよ!」

『ゴシッ!』

俺の頭に鈍い衝撃が……。

翔によるババチヨップだ。

「ITTER！ お前、命の恩人になんて……。」

「そんなことより、俺が知りたいのはあの＜強さ＞についてだ。お前はエアも使えない。なのにどうしてあんなに強いんだ？」

「ん？ それはもう、向こうで師匠に鍛えてもらったからな」

そう、俺は向こうの世界で武術全般を、師匠から教ったからこそ、ここまで強い。

自分で強いとか言っちゃったよ……。

「それを俺にも教えてくれないか？ 俺も強くなりたいんだ！」

身を乗り出して、翔が頼み込んでくる。

「ああ、別に構わ……。」

ん？

そこで俺はひらめいた。

「土下座して、『俺を強くしてください師匠！』って言ったらい
ぞ？」

自分で言っておきながら、なんて悪趣味なんだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

翔は席から立ち上がり、俺の横に来る。

まずは膝を付け、震えながら手をつく。

おそらく己のプライドが許さないのだろう。

それからゆっくりと頭を下げていく。

「お・・俺を強く・・してくだ・・さい・・・・・・・・し・・し・・」

「んん？ 聞こえないなあ？」

わざと焦らす。

「し……し……死ねええええええええええ！」

吹っ切れた翔が、ババチヨップをしてこようとする。

「その技は見切ったああ！」

紙一重で躲す。

バリィン！！

何か、フシュ〜とか言いながら、俺の後ろにあつた花瓶が割れてるんだけど・・・。

「分かった、分かったからもうやめろ！」

一撃目を繰り出そうとしている翔を、慌てて制する。

「フルルルルウ・・・」

なんかどっかの獣みたいになってるけど、どうにか落ち着いてくれたようだ。

「ありがとうございました」

店員がまたも礼をして、俺たちはカフェを後にした。

というか、あの割れた花瓶はどうするんだ？

弁償代とかも請求されてなかったみたいだし……。

ま、今になって気にすることでもないか。

「ところで紅葉。これからどこに行くんだ？」

歩きながら、正常になった翔が訪ねてくる。

「ん？ 修行といたら森しかないでしょ。近くにあるみたいだし」

「寝る場所はある？」

「そんなのあるわけ無いじゃん。野宿だよ、の・じゅ・く！」

最後の方を強調している。

「ふーん……それって辛いのか？」

「まあ、辛くなきゃやる意味なんだろう？」

「確かにそうだが……」

なんだか渋い顔で言う翔。

「いいから行くぞ！ いざ森へ、二人っきりの籠もり修行！」

「籠もんのかよ！？ それと、その言い方はやめろ、気持ち悪い！」

こんな調子で、俺達は近くの……

あの恐竜がいた森へと向かう。

第四話：とあるカフェにて（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

次からは、籠もり修行！！

だと長くなりそうなので、ちょっとカットしながら進みます！

いやー、今振り返って気がついたのが、3話まで名前が出てきてなかったw

まあ、許してください。

そして、何か更新スピードが早かったんですが次回からは分からないかもしれません。

でも、頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612y/>

Air force

2011年11月27日15時50分発行